

日本の大衆音楽に於ける「歌詞」の功罪

大 出 孝 祐

人間、誰しも時に触れ nostalgia を感じるものである。その形態は、基本的には、聴覚を主体としたもの、味覚を、又視覚を主体としたもの等、五感から端を発したものが多い。私自身、美味しい、不味いは別にして、年に一度か二度再会する母の作ったみそ汁の味が懐かしいし、子供の頃遊んだ、何の変哲もない小川に今でも多大な愛着を感じている。

さて、聴覚を通じて、相手に感情移入する手段の一つとして、音楽が挙げられる。ここでは、純音楽には触れず、大衆音楽、とりわけ、歌謡曲について述べてみたい。大衆向け歌唱曲として最も幅をきかせているものに^{注1}歌謡曲が挙げられる。一般に娯楽芸能と呼ばれるものは、不特定多数の大衆を前提とする以上、他のジャンルよりも、mass media への密着度が高い。例えば、大晦日のNHK「紅白歌合戦」は、6,000万人以上のきき手に歌謡曲を提供していると言われている。又、年平均5,000万枚以上の歌謡曲のレコードが販売されているとも言われている。これ等の例は、つまり、mass media に密着したあり方を示していると言えよう。歌謡曲は大衆の心を歌ったものだという説がある。つまり、歌謡曲は人々の心理的状态に対応しているというのである。歌を聴いたり歌ったりするのは、喜怒哀楽といった心理的状态があるからだというのであろう。たしかに社会の流れの歴史的形態の中にはそうした事実がある。古くは、明治43年、神奈川県の鎌倉と江の島の間七里が浜の沖で^{ずし}返子開成中学所有のボートが沈み、乗り組んでいた12名が全員溺死した。いわゆる「真白き富士の嶺」である。歌詞は当時鎌倉女学校教諭、^{みすみず}三角錫子。真白き富士の嶺／緑の江の島／仰ぎ見るも今は涙／帰らぬ十二の雄々しきみたまに／捧げまつる胸と心。……

こういう突発事件は、流行歌になりやすい。軍歌の類もこれと同様なもので、その歌が悲しみを表わすというよりも、その歌が歌われる時は常に悲しい社会的状況にあるという事になる。ちなみに、「真白き富士の嶺」は、大和田

建樹作詩，アメリカ人のガーデン作曲の「夢の外」（明治23年刊）という歌の替え歌であり，もと歌を知っている人は希である。

これ等の形態の流行歌は，明治，大正，昭和の初期に比較的多く見受けられるが，mass media の発達に伴い，映画の主題歌として作られたもの，ラジオドラマの主題歌として作られたもの等，社会的態勢，事件のような，現実とは無縁化されたものに方向付けられ，多分に営利を目的とする現在へ移行するのである。したがって歌謡曲として，大衆の心の歌とは言い切れない情勢にある。つまり，非現実化された歌詞に基き，それに即したメロディーを形成し，悲しい時に悲しい歌を聴き歌うのではなく，歌謡曲を聴き，その中には悲しい歌もうれしい歌も含まれうるといった，没個性の中での単に皮膚感覚を温める手段に過ぎないと言い得る事が出来ようし，近来ますますその皮膚感覚とやらに対応する歌詞には，かつての多少なりとも匂っていた文学的要素，倫理感もどこかへ追いやられてしまっているような気がしてならない。少なくとも昭和20年代までは，歌謡曲は，良かれ悪しかれ，社会的文脈の中に位置付けられたものが多かった。

明治の前期（20年前半まで）に於ては，忠君愛国精神を説き，子供には唱歌教育を芸術教育とは考えず徳育涵養のための教科として扱われた。代表作として，「螢の光」（14年），「あおげば尊し」（17年），「君が代」（13年）がある。もちろん子供用には，普通の唱歌も与えられた。「蝶々」（14年），「霞か雲か」（16年），「庭の千草」（17年），「埴生の宿」（22年）等がそれであるが，歌詞が難解で，ほとんど，外国歌曲の翻訳ものであったから，当時の児童には，日本調わらべ歌から，いきなり西洋音階へ移行した事も手伝って，極めて歌いにくいものだった。したがって大部分の子供は次第に唱歌嫌いになった。今日，50才以上の人々が，みずから「音痴」だと称して謙讓？になるのも，この時代から大正末期にいたる歌唱教育の「公害」によるものと言えなくもない。

明治の中期，（30年代まで）に致っては，前期の反省の上に立ち，日本人の歌い易い音階が工夫され（西洋音階の第4，第7音を省いた，半音階抜きのみわゆるヨナ抜音階），又，文学上の言文一致の影響をうけて，子供の歌の歌詞が従来の文語調から口語調に変わった。このことは現場教師に支持されたが，

当時の文部省官僚はこれを「品位のない」ものとして容易に受け入れなかったという事実がある。しかし子供達の圧倒的なよろこびと現場の教師の声は、ついに勝利を収めた。

この時代の唱歌が多く今日まで生命を保っているのもこういった理由にもよる。又、日清戦争の煽りを受けでの軍歌の出現に伴ってほとんどの唱歌は行進曲風である。作品としては、「敵は幾万」(24年)、「婦人従軍歌」(27年)、「港」—「空も港も夜ははれて」(29年)、「夏は来ぬ」(29年)、「大楠公」—「青葉茂れる」—「鉄道唱歌」—「汽笛一声」(33年)、「金太郎」「桃太郎」「浦島太郎」(いずれも33年)等多数あり、又、滝廉太郎の出現により、日本人の手に成る芸術作品も生まれている。「荒城の月」(34年)、「花」(33年)等がこれに当たる。又、大正7年、おとなの理想や意識で、子供を上からそして外側から引きまわし教導しようとする明治期以来の教育精神への反発として、鈴木三重吉の主宰する「赤い鳥」運動が起こり、この童謡活動には、作詞では北原白秋、西条八十、作曲では、成田為三、弘田龍太郎等が活躍している。

紙面の関係上、詳細は省略するが、いずれにしても、背景には何等かのイデオロギーが存在していた事は否めない。我々が普通、最初の歌謡曲と考えているものは大正3年の「カチューシャの歌」(島村抱月作詞、中山晋平作曲による)である。「ゴンドラの唄」—「いのち短し恋せよ乙女」「吉井勇(大正5年)」、「さすらいの唄」—「行こか戻ろかオーロラの下を」—北原白秋(大正6年)、「宵待草」—「待てど、暮らせど」—「竹久夢二」、「船頭小唄」—「おれは河原の」—「野口雨情(大正10年)」等、当時は、いわゆる詩人が携わった事も、紋切り型の詩情乏しい現代の歌詞と異なる理由になるかも知れない。歌謡曲の歌詩についての歴史的な分析では、見田宗介^{注2}の研究が興味深い。彼は明治元年から、昭和38年までの流行歌、497曲について「怒り」「かなしみ」「よろこび」「慕情」といった、「心情のモチーフ」(見田氏の用語)がどのようにあらわれているかを調べている。例えば悲しみの分析で、日本の流行歌で最も多く使用された単語が「涙」である点に注目した見田氏は、「涙」の含まれている曲の比率を時代別にあげている。

明治前期(明治1~22年) 1.0% 明治後期(明治23~45年) 10.7%

大正期（大正2～15年）13.0% 昭和初期（昭和2～20年）28.3%
戦後期（昭和21～38年）36.7%

これ等は、その時代時代の大衆の国家的社会的思想、生活水準などが、うかがえるような気がする。特に高度経済成長とやらで、生活にゆとりが出て来た戦後期に於ては、日本人の最も好む処の「悲しみの美学」に浸り切る、いわゆる「甘えの心理」が横行しているのかも知れない。最後に、少なくとも、昭和の20年代に子供時代を過ごしてきた人々は、唱歌、童謡、ラジオ歌謡といった、比較的趣味の良い、エロ、グロ、ナンセンス以外の歌唱曲を子守り歌とし、nostalgia として持ち合わせている事と思う。現在の家庭では、父親の持ち込んだ娯楽雑誌は、子供の目に入る前に処分し、テレビでの怪しげな映像が出て来ると、親達は、しどろもどろになるそうだ。しかしながら、歌謡曲は親子ともども何等の抵抗感なく楽しんでいるのが現状である。

次に挙げる単語群は、TBS放送の調査部が1967年に流行した50曲の歌詞について、単語の使用頻度を調べ、頻度の高いものから並べて次のような歌詞を合成している。（傍点のつけられたのが対象となった単語である。）

あな．たを．恋．した．わ．た．し．な．の　愛．し．あ．つ．た．夜　涙．の．ふ．た．り　逢．い．た．く．て
泣．け．て．き．ち．ャ．う．の　ひ．と．り．ぼ．っ．ち．で　星．に．夢．み．る。

幼・少年期で育まれた生活環境は、成人に達した時、一番強烈な nostalgia として残る。論理性が芽生える以前の感覚、感情の最も発達する時機だからである。が、現在の mass media は、子供等の将来については、ほとんど考えてくれない。しかし、その歌を聴くと、たちまちのうちに、過去へ引き戻してしまう Time machine 的作用を持ち合わせているのが歌の強烈な作用だと思う。地に足のつかない空とぶ怪獣マンガとセックスのみを歌いあげるような商業用歌詞を nostalgia として成人して行きかねない現在の子供達の将来。なんとかならないものであろうか。

注1 流行歌を歌謡曲と呼ぶようになったのは、昭和4年にNHKが当時の流行歌を放送する際に、はたして流行するかどうかわからない歌を公共放送が「流行歌」と呼んで、宣伝するような印象を与えるのを避けたためだと言われる。（日本放送協会「日本放送史」472頁）

注2 見田宗介著 「近代日本の心情の歴史」—「流行歌の社会心理史」昭和42年、講談社ミリオンプックスより引用。